

はじめに——日高見国の歌か……………3

序章 「日高見国」の出所……………15

第一章 人類は日の上る場所に憧れ、「日高見国」を目指す……………23

日高見国とは「高い太陽を見る国」……………24

アフリカを出発した人々……………27

東へ向かった人間達……………28

なぜ人間は満足の地を離れたか……………29

日本列島はパラダイスの極東……………31

日本列島から大陸へ戻る構図……………32

日本列島に至る七つのルート……………34

縄文はアメリカ大陸に渡った……………35

世界各地の要素が日本人の血に……………38

すべてが正しく見える日本語起源説……………39

世界が集約する日本の神話……………41

生物学的、文化的に人間の全体……………43

国内外で語られずに来た日本……………44

日本の知識は宣教師の著作から……………46

中国の歴史が注目される理由……………47

日本でも語られない日本……………50

日本を知ることが世界の潮流……………52

社会主義の失敗による袋小路……………54

キリスト教というナシヨナリズム……………55

クリントンの理性とトランプの野生……………57

社会主義を必然の理想とする人々……………58

アメリカを描いた人々……………60

「何も変わらない日本」への注目……………61

日が上る地は、日出づる国……………63

第二章 アマテラスと日高見国

日が上る地の太陽神アマテラス	66
古く神宮は、伊勢、鹿島、香取のみ	67
鹿島神宮、香取神宮は神武以前の創建	68
東国で祭られていたアマテラス	71
タカミムスビが統治する祭祀国家	73
縄文人口シミュレーションに見る歴史	76
日高見国前期・後期と呼ぶべき時代	80
旧石器時代の列島開拓のパイオニア	82
農耕の開始が「進歩」の起点ではない	84
三内丸山遺跡が予感させる一大文明	86
太陽信仰と山岳信仰の結合	88
国家の存在を示す縄文の文化	89
日本人の篤い富士山信仰	90
統一した信仰の存在と国家	93

第三章 神話は建国のドキュメンタリー

関東に始まる日本の歴史	108
ヒルコは近親婚の危険性の認識	110
土偶の異形は奇形児の表現	112
鎮魂と崇拝のためにつくられた土偶	113
縄文の母系制社会を映し出すヒルコの逸話	116
日本にはないインセスト・タブーによる文化定義	117
イザナミは縄文、イザナギは弥生	118
第三章 神話は建国のドキュメンタリー	107
古事記、日本書紀に描かれない東国	104
人間の均一性が育む安定した文化	102
縄文採取経済の意味	101
独立した文明を持つ日高見国	99
信仰とは「なぜ太陽は上るのか」という疑問	97
神として記憶される長者の家系	95
日高見国を象徴する三内丸山遺跡	94

別の種族と関係を持ち始めたイザナギ	119
新説が裏付ける西日本の人口増加時期	120
西日本人口増加と一致する弥生時代開始時期	122
縄文・弥生は日高見国前期・後期	123
国譲りは日高見国の列島統一事業	124
高天原の人々の移動手段は船	125
強力な軍事勢力だった東国の高天原	127
第一級の政治家だったタケミカヅチ	129
出土した三五八本の銅剣の意味	131
神武天皇以前の日本建国の立役者	133
アマテラスの孫ニニギ	134
天孫降臨の案内役サルタヒコ	135
太平洋ルートが使われた天孫降臨	136
鹿児島県に諏訪神社が多い理由	137
鹿島と鹿児島	138
隼人と熊襲	139

アヅマとサツマ	140
もうひとつの天孫降臨	142
物部氏、中臣氏もまた関東の発祥	144
東を背にして勝利したイワレヒコ	145
大陸の情勢と天孫降臨	146
春秋戦国時代と秦の統一	147
徐福伝説が史実である可能性	148
徹底的に国土を守るといふ国柄	150
八世紀当時の常識で書かれた記紀	152
第四章 高天原は関東にあった	155
葦原中津国はどこにあったか	156
高天原を書いた常陸国風土記	157
「かぐしま」と「かぐしきま」	159
防人と鹿島神宮	161
神武天皇の「鹿島立ち」	162

茨城県鹿嶋市高天原	163
古事記・日本書紀に書かれた高天原	164
神話の中で変化し続ける高天原	167
高天原とは高いところへのあこがれ	168
富士山こそが高天原	169
タケミカヅチの生誕地にふさわしい富士山麓	170
常陸国と高天原の関係	172
タケミカヅチの常陸国入り	173
大和から離れた関東に祀られた理由	175
筑波山の旧名「二神山」とは何か	177
天と海とアマの関係	178
関東の再評価が新しい日本史体系の鍵	180

第五章 芳醇なる常陸国は高天原に通ず

神仙郷だった常陸国	184
旧石器時代からの人々の定住	186
活発な生活を物語る縄文遺跡	187
重なっていた縄文と弥生	188
県下の二割の古墳が集中する鹿島	189
古墳と神々の関係	190
関東の強力な武力の伝統	191
鹿島神宮のタケミカヅチを崇めた神武天皇	193
製鉄の地でもあった鹿島	194
鹿島をとりわけ重要視した大和	196
ヤマトタケルと鹿島	198
鹿島に生まれた藤原鎌足	199
鹿島神宮、香取神宮、そして富士山	200
おわりに——縄文土器の意味するところ	203

序章 「日高見国」の出所

SAMF ✓

「日高見国」という言葉をご存知でしょうか。かつて日本列島に存在した国の名前です。日高見国はまず、『日本書紀』の中で、二カ所に登場します。第一二代景行天皇の御代に、武内宿禰という側近が北陸・東北の諸国を視察しました。その報告に、「東方にある広大で肥沃な土地」として日高見国が出てきます。

そしてもうひとつ、ヤマトタケルノミコトが東征したときの最終の訪問地として日高見国は登場します。同じく景行天皇の御代の話です。このとき、日高見国はヤマトタケルにとっては平定すべき対象の国でした。

鎌倉時代にできた日本書紀の注釈書『釈日本紀』には、日高見国の解説があります。「第三六代孝徳天皇の御代つまり大化改新の時代に、茨城に新しい行政区として信太郡がおかれたと『風土記』の常陸国（現在の茨城県）編に残っているが、この土地がもと日高見国と呼ばれた地域である」という解説です。

現代でこそ耳慣れない言葉ですが、「日高見国」は長い間、常識として知られていた国の名でした。その名称は今も日本各地に、日高、日田、北上、飛騨、飯高、日上、水上などの地名として残っています。

日高見国は、なぜ常識として記憶されていたのでしょうか。それは、平安時代の行政細則書『延喜式』に定められた祝詞「大祓詞」に、日本全体を示す言葉として「大倭日高見

之国」という表現が使われていることからわかってきます。

「大倭日高見之国」は、大陸サイドの蔑称に近い呼称「倭国」を美化した言葉に過ぎないという説もあります。しかし、それにつけても、これは間違いなく、日本という国は、「倭」大和」と「日高見国」の二つの国から、あるいは二つの国が合体してできあがっているという当時の人々の認識を示しています。

二つの国という認識は、大陸の歴史書『旧唐書』（一〇世紀成立）および『新唐書』（一世紀成立）にも見られます。「日本伝」が両書にあります。どちらも同様に「小国が大倭倭国を併合し日本と名のる」と説明しています。日本からの使者がそう伝えた、といえますから、これが当時のわが国の公式見解です。

「大祓詞」と照らし合わせて考えれば、両唐書にある「小国」が日高見国を指すことは間違いないでしょう。日本は、「日高見国」が「倭」を併合することで成立した国だということになります。

有名な史資料から、これだけのことわかります。日高見国は日本の歴史においてとても重要な国ですが、学校の授業などでは決して教わりません。こんな話は初耳だという方も多いでしょう。

しかし、問題はここからです。日高見国は、実は、日本史を大転換する重要性を秘めた

一大国家でした。それを明らかにしているというのが本書の目的です。

先に述べた、一連の史資料に登場する日高見国は、時代が進むにつれて小国化していった日高見国の残滓に過ぎません。結論から先に言いますと、日高見国はかつて縄文・弥生の時代に、関東・東北を広く束ねた、日本列島を担う、日本の源郷とも言うべき国家でした。

日本の神話に描かれているのは日高見国の歴史です。日高見国は、いわゆる古代エジプトとニュアンスの近い祭祀国であり、エジプトと並ぶ、あるいはそれよりも歴史の深い文明を持っていました。

とんでもない話だと、驚かれる方は多いかもしれませんが。日高見国が倭を併合して日本という国ができたという話以上に、これは聞いたことのない話だと思われるでしょう。

初耳あるいは初耳に近いのは当然です。日高見国の実際についての研究は、すべて、ここ二、三〇年の間に明らかにされてきた事物、事実がもとになっていますから、もちろん教科書などにはまだ、決して載ることはありません。

この二、三〇年の間、日本の歴史研究の世界では、特に考古学的な分野での事物、事実的根拠において、めざましい発見が相次いでいます。一九九二年から開始された三内丸山遺跡（青森県）の本格的調査をはじめとする大集落型の縄文遺跡発掘、放射性炭素年代測

定による遺物の年代の再調査、DNA解析と考古学の組み合わせによる文化伝播の見直し、遺跡発掘調査から解析された縄文・弥生時代の日本列島人口分布の実態などから、研究者の直観や印象に頼ることのない、すがすがしい「事実」が次々に発見されています。

しかし、それらの新事実が、みなさんの目にふれる日本史に反映されることは、まずありません。日本の歴史学会には文献主義というイデオロギーがあり、文献を補強する発見であれば取り上げますが、そのほかは無視する傾向があります。

大学という機関は縦割りの仕組みで利権を守りますから、文献主義の歴史学者はもちろん、考古学者もまた、新発見があつたとしても、それをもとに歴史を建て直すような作業はまず行いません。日本国史が大転換する根拠を目の前にしても、あえて躊躇し、保留します。これは、歴史修正主義という言葉が悪い意味でしかとらえずに、自虐史観のぬるま湯に甘んじるといふ深刻な問題にも関係しています。

私はとりわけ、縄文・弥生時代の日本列島の人口分布の推移に着目しました。縄文時代を通じて、日本列島の人口は、その九〇パーセントが関東・東北に集中していました。日高見国は、まさにこの人々の国であり、古事記・日本書紀に描かれた神話は、まさにこの人々の歴史だと考えます。

日本の中心は日高見国として関東・東北にありました。高天原は関東にあり、アマテラ

スは関東を本拠とする太陽神であり、国譲りは関東勢力による統一事業であり、天孫降臨は関東から西国に向けて行われた遠征事業であり、神武天皇の東征は九州を起点とする戦略をとった関東勢力による再統一事業と思われまます。

これらの論はすべて、この二〇三〇年に発見された、あるいは明らかにされた事実、事物を根拠としています。統一事業は、大陸の政治的情勢ともリンクしています。日本の神話には、実に歴史が描かれているのです。いままでの日本の歴史は、ここから大転換することになるでしょう。

日本国内も同じことかもしれませんが、海外に、日本をともに研究する学者は決して多くありませんでした。そんな中、晩年、特に親日家として知られたフランスの社会人類学・民族学者レヴィ・ストロースはこう言っています。

《われわれ西洋人にとつて、神話と歴史の間は、深い淵で隔てられています。それに對し、もつとも心を打つ日本の魅力の一つは、神話も歴史もごく身近なものだという感じがすることなのです。今日なおたくさんのバスで観光客が押しかけてくるのを見れば、国の初めの神話や、その舞台と伝えられる雄大な景色のために、伝説の時代と現代の感受性との間に生きた連続性が保たれているのだとわかります。》

『古事記』はより文学的ですし、『日本書紀』はより学者風です。しかしスタイルこ

そ違え、どちらも比類のない巧みさをもつて世界の神話の重要テーマのすべてをまとめ上げています。そしておのおのの神話が、知らず知らずのうちに歴史に溶け込んでいます。》

(日文研フォーラム講演「世界の中の日本文化」一九八八年 訳・大橋保夫)

次章より、日高見国とはどんな国だったのか、日本の神話に歴史そのものが描かれている、その實際を明らかにしていきたいと思えます。いかに日本が、今もまた芳醇な歴史を蓄積し続け、「おのおのの神話が、知らず知らずのうちに歴史に溶け込んで」いる国家であるかということが、事実のあるがままに、おわかりいただけるでしょう。

※時間的な位置をわかりやすくするために、本書内の年表記はあえてすべて西暦としました。

第一章 人類は日の上る場所に憧れ、「日高見国」を目指す

SAMF ✓

日高見国とは「高い太陽を見る国」

まず、「日高見国」という名称について考えていきたいと思います。この名は、たいへんよくできている名称です。日本という国の成り立ちから、地理的な特色、その特色からくる文化の特性までフルに説明できる名称だということをお話ししましょう。

この名の由来には、いくつかの説があります。日高見国をひらがなでひらくと「ひたかみのくに」あるいは「ひだかみのくに」となりますが、おおむね、「ひた」あるいは「ひだ」でくぎり、その意味を追究する説がほとんどです。「ひだ」は「夷（ひな）」の転化で、日高見国とは「夷の国」あるいは「蝦夷の国」、つまり辺境の蛮国だとする説もあります。

しかし、日本書紀は、大陸でも読解できるように漢文で書かれています。日高見国は漢字で「日高見国」と書かれており、当然、それ自身が原義を表しているはずです。「ひたかみ」を訓読みとして、あくまでも「ひたかみ」全体でひとつの意味を持つと考えるのが常識というものでしょう。

漢字で読めば「ひ」は「日」で太陽です。「たか」が「高い」、「み」は「見る」です。「高い太陽を見る国」が「日高見国」の意味です。

ただし、日高見国が「蝦夷の国」あるいは「東夷の国」を意味した、というのもあなが

ち間違いではありません。「はじめに」で述べたように、日本書紀の景行天皇の巻に登場する日高見国は、東方にあつて平定すべき国として書かれているからです。

しかし、これは時代を経て、国名としては消滅する間際の、小国となった日高見国です。名称の由来を「夷」から発想するのは時間の遡及です。そこには、東方は辺境の地だったという偏った歴史観が先にあります。

また、日高見国を現実存在した国として素直にとらえることさえ、従来の歴史学は拒んできました。その原因のひとつには、大正から昭和時代にかけての日本史学の権威・津田左右吉氏の、古事記・日本書紀を史料として批判的にみる、ここ一〇〇年ほどの間に半ば定説と化した歴史観があります。津田左右吉氏は日高見国を《実際の地名とは関係のない空想の地で、日の出る方向によつた連想からきたもの》（『日本古典の研究・上』岩波書店）としています。

興味深いのは、『日本古典の研究』が発刊された六年後の一九五四年に、神話学者の松村武雄氏が神話学の立場から、日高見国を現実の場所・地域として解説していることです。

松村武雄氏は「日高見」を「日の上」と考えました。天孫降臨があった日向国から見て東にある大和国をまず「日の上の国（日が上る国）」と呼び、神武東征の後、中心が大和に移ったことから、「日高見国」は大和国よりも東の地方を指す言葉となった、としてい

ます。これも「はじめに」で触れましたが、それが大祓詞にある「大倭日高見之国」の正体だ、というのです。

松村武雄氏の説によれば、日高見国は東国のかかなり広い領域を指すこととなります。西の「大和国」に対して、東の「日高見国」ということになるでしょう。東国全体が「日が上る地方」であり、「日高見国」であり、関東・東北全体を表すこととなります。これはある程度、日高見国の規模を正しくイメージしています。

そして、「日が上る地方」とは、日本の内側から見ただけのもではありませんでした。日本列島はユーラシア大陸の東端に位置する列島であり、世界全体から見た「日が上る地方」もまた日本列島でした。

再び驚かれるかもしれませんが、人類は発祥以来、結果的に日本列島を目指して移動し、世界中に散在することになったと思われるのです。人類は日が上る場所を理想の場所として考え、そこを目指して移動し続けたと考えられるからです。歴史的にフランス語でもイタリア語でも「太陽の上る」国は日本でした。今でもそうです。

理想を求めて移動する、その到達地点に、「日が上る」日本列島はあり、そこで形成された国家が「日高見国」だったので。

アフリカを出発した人々

現在、分子生物学の発展などから、人類の発生と移動の様子について、かなりのことが明らかになっています。かつては、北京原人（一九二七年からの発掘調査で北京市郊外から化石が出土。近年の研究で七八万年前〜六八万年前のものとされる）がアジア民族の祖先とされていましたが、ミトコンドリア解析の結果から、この説は二〇一二年の時点で完全に否定されています。北京原人は、かつて絶滅した幾多の種族の中のひとつに過ぎないことがわかってきたからです。

二〇〇二年にアフリカのチャドで、現在世界最古の人類化石が発見されました。七〇〇万年前〜六〇〇万年前の地層から出土しました。このことから、人類の発祥はアフリカだということがさらに確実になってきました。

人類は、二〇万年前から一〇万年前にかけてアフリカで、現在の私達に直接つながる現生人類に進化しました。彼らは六万年前にアフリカを離れて世界各地に広がり、ネアンデルタール人などといった各地先住の種族と交代、あるいは混合します。

これが、現在の私達いわゆる「人間」の誕生のあらましですが、これらはすべて、ミトコンドリアDNA解析技術の整備を待って、一九八〇年以降の研究からわかったことです。



世界地図

馬場悠男「特別講義 顔から探る日本人の成り立ち」北の縄文文化を発信する会編『縄文人はどこへいったか?』インテリジェント・リンク 2013年より

北京原人が私達の先祖などではないことがわかったのも、つい最近のことなのです。

東へ向かった人間達

アフリカを発った人間達の一部は、およそ四万年前に現在のヨーロッパに住み着きました。白人はココソイドはこうして生まれました。

東に向かった人々は、ヒマラヤ山脈を境に北と南に分かれました。一方は五万年ほど前にインドシナ半島までたどりつきました。他方は、三〇二万年前にシベリアに至りました。

シベリアに向かった人間達は、寒さに強い黄色人種はモンゴロイドになりました。彼らは、さらにベーリング海峡を渡るか、または、太平洋の島々を巡って北・南米にたどりつき、アメリカ大陸の原住民となりました。

地球上の人間は、すべて、アフリカを発祥とします。ではなぜ、私達日本人は、黒人や白人と、肌の色も顔の様子も体つきも違うのでしょうか。それは、簡単に言えば、北を回ってくることで、寒さに耐えるように出来上がってきたからです。

多くの日本人の顔が平たく、鼻も低くできているのは凍傷のリスクを低くするためです。一重まぶたが多く、まゆげやまつげが薄いのは、氷結を避けるためです。小柄、大柄の体つきも、表面積と体積の関係、つまり、体内でつくられる熱と放出する熱の差と外気温の関係から決まっています。

北ユーラシア経由の移動が、私達、新モンゴロイドの特徴をもたらしました。かたや南へ回った人間達を旧モンゴロイドと便宜上呼んでいます。彼らは東南アジアにたどりつき、顔の彫りが深くなり、手足が細くなりました。肌の色が濃く、あるいは黒くなったのは、紫外線リスクを下げるメラニン色素が増えたからです。

なぜ人間は満足の地を離れたか

西洋に「光は東方より」という言葉があります。一般的には、文明は東方（エジプトやメソポタミアなどのオリエント）から興った、という意味で使われます。古代ローマのこのわざだとされていますが、簡潔で非常に優れた文明評です。

『旧約聖書』の「創世記」に登場するエデンの園は、漠然と「東の方にある」と記されています。理想郷ないし楽園であるエデンの園は、東にあるものとイメージされています。また、古来、カトリック教会の建築においては、内陣（主要祭事を執行する聖職者専用の区域）は、東に向けて設けられています。

なぜ、「東」なのでしょう。文化の光は東方から来ると考えられ、理想の土地は東にあるとされました。

その精神のよりどころが「太陽」にあるということは、まず間違いないことでしょう。人間が歩き始めるとき、まず、どこへ向かうのか。すべての生活、すべての生命の指針あるいは原動力が「太陽」であるということは、あらゆる時代を通じて言えることです。

アフリカは、人類発祥の地だったわけですから、現在のように砂漠化もそれほど広がってはおらず、乾燥もしていなかったはず。気温は高く、衣食住も満たされる環境にあったはずで、その場に長くどまることも十分に可能でした。

唯物論的に考えるなら、単に豊かな土地、つまり食糧に困らない土地という条件を第一におき、人間はみなアフリカにとどまっていたはず。しかし、人間はアフリカを離れた。つまり、

即物的に豊かで安定した土地へ向かうというよりも、人間は、より良い土地、つまり、

パラダイスと言ってもいいかもしれませんが、精神的なものまで含んだ理想の土地へ向かったのです。長く、地球は球形ではなく平らだと考えられていました。大地を太陽が昇る方向へ向かうことが、すなわち、理想に向かうことを意味しました。

「太陽」というひとつの基準が、憧れの土地、希望の土地へ向かう指標となりました。アフリカから動くということは、少なくとも、わざわざ寒い場所へ移動するということです。少し移動してみれば、この現実はずぐにわかったことでしょう。しかし、あえて人間は移動しました。

太陽という存在が、人間が理想を求める気持ちの基本的なダイレクション、方向というものをもたらしました。ここには、食べることや衣食住といった問題を超越するものがあります。文化的なもの、精神的なものが、すでにここにはありました。

そして、キリスト教でさえもが聖書に記している「パラダイスは東にある」という観念のいちばん極東に位置しているのが、私達の日本列島だったと思われず。

日本列島はパラダイスの極東

世界が考えるパラダイスの極東にして到達点が日本列島だったはず。これは、つくりごとでも、日本びいきの願望でも何でもなく、日本列島の物理的な位置関係から推論で